

Fri 04-Jun-2010

村主朋英 (愛知淑徳大学人間情報学部)

Pinakey という名の由来 : iPad の核心

我が家の iPad の呼び名・Pinakey は、keyboard 付きの pinakes, というような趣旨で名付けた。

その心。

iPad を「冊子にかわる新しい書籍の形態」と概括した上で、出版業界の既得権を脅かす可能性へとすかさず話を転ずるといった報道が見られる。紋切り型の論調もさることながら、単に電子ブックリーダーだと見なすことに無理がある。

かといって、やや目新しい操作系を持つ個人用多機能機と見るのも、好ましくない。そう思った途端、あれこれ改良を求めたくなるし、機能や性能において競合製品がすぐに凌駕していくだろう。それは、最も重要な部分がないがしろにすることだと思う。

たぶん、この、全てにおいて中途半端な点が最大の武器だ。その欠落ゆえに、何か別の大きな実体への依存を常に、宿命的に必要とするという特性が本性なのではないか（他の機械と接続しなければ機能不全というだけではなく、別のところに置かれた何らかの情報の集積体に依存するという特性があると考えられる）。その特性に即し、一言で iPad を規定すれば、「持ち運びできるインデックス」（あるいはレファレンス）と言えそうである。

見た目についても、思うところがある。一般には「一定の時間を経て、技術の進展とキーボードを露出させないなどの新発想の盛り合わせにより何とか実現した dynabook」と見るところだろうが、私は、単に板きれだと考えるべきだと思う。

ただ、この単なる板きれというものが曲者で、文明時代 5000 年、人類はそのようなものに異常に執着しながら過ごしてきた。粘土を板状にして用いたことに始まり、パピルスの支配が訪れても蠟引きの板を併用した古典時代、主役がパピルスから羊皮紙へと転換しても脇役の蠟板がなおも生き延びた中世、という具合に、長らく、手に持つサイズの板状のものがいつもそこにあった。

もっとも、その間、時とともに情報の流通単位が肥大し、薄手の媒材を利用した巻物が普及し、その容量面の利点を移し替えた上で利便を増した冊子体は、中世に「メディアの帝王」の座を占めた。印刷時代になると、冊子形態が引き続き維持される一方、「板状のもの」は、一時期に見られた文字学習用の書字板あたりを最後に姿を消し、過去のものとなったかに見える。

しかし、その冊子形態はもともと蠟板の写しが起源であり、平板の集合体という性格を持つ。さらに、Ong らの指摘するように、印刷時代にはテキストに二次元空間としての特性が付与されるに至ったことも、何か、板状のものへの執着の名残かもしれない。そう思うと、TV 受像機であれコンピュータ画面であれ、「窓」のように機能する平面体がしきりに現れてきたことに気づく。これらは、おそらく、何かを示している。

冊子図書の厚み、そしてその累積によって形成される空間 (=library) は、人を疎外する。写本が声の写しと捉えられている限りは、その内容を一つのまとまりとして把握しようという気になったかもしれないが、印刷図書の場合は、そんな冒険がますます困難となる。

そこで人類は、種々の集約的著作物を生産しつづけ、要約された文書のほかに、目録や書誌を生み出した。だが、それら二次的情報源が冊子やカード等の形態をとり、一定の分量を持つ限り、厭わしいものとなる。人は懲りないので、そこで情報検索への模索がはじまり、現代の「予想と異なり、計算機の帝国としてではなく情報検索の楽園という形で実現した情報化社会」が生み出されるに至るが、検索のための端末が複雑怪奇な機械であれば、再び落胆が待つことになる。

人の手には、板きれがちょうどいい。手に余る量の知覚要素を目前から遠ざけ、その写しを媒材に載せるのが記録であるが、量的に超過が起こればそれをそこから追い出し、かわりに今度はその写しを板に載せるようにすれば、板の上は常に適量が維持される。

物理的に板でなくても、たとえば新聞の第1面にはそのような意思が反映し、図書の標題紙や表紙が図書自体の代用物となるなど、何か「そのようなもの」が求められてきた。そんな板好きの道の一つの到達点となる「魔法の板」が iPad なのではなかろうか。

私の iPad の名の由来となった **pinakes** は、ムセイオンを拠点として活動した古典時代の学者・カリマコスの手による解題書誌で、実質的にアレクサンドリア図書館の所蔵目録であると解される。

その原義は「板、プレート」であり、おそらく箱・籠や棚等の内容物を簡潔に記した銘板のイメージを投影・転化した用法と推測される。**Pinakes** の形状はパピルスの巻物だったのだろうが、そのかわり、大図書館蔵書を十分に網羅し、それを通じて古典古代の文献世界を掌握することのできる、「壮大な板きれ」だったはずである。

iPad はその点、それ自体はまさに板きれの姿を保ちつつ、種々の工夫によって無限の連鎖の端緒となる。収蔵物の出納のための粘土板は倉庫の中の宝物の世界へ、文字種が並べて記された書字板は *literate* の世界へ、といった具合に、その先の大きな何かへとつながったが、もっともっと大きな何かにつなげるまでには至らず、何らかの制約が介在した。それに対し iPad は、把握されているあらゆる知識へとつながる世界索引である。

つまり iPad を持ち運ぶことは、世界の尻尾をつかんだまま闊歩することなのである。